鋼鉄城の勇士《ハロルド・シェイ③》*The Castle of Iron* (1941,50) デイ・キャンプ&ブラット (関口幸男訳) 早川書房 (文庫) (3／31刊・¥360)

ハロルド・シェイの第三巻目。実在の物語内世界へと、〝論理学的〟に入り込む、シェイたちの冒険ものだ。北欧神話、スペンサー『妖精の女王』ときて、今回はアリオストの『狂えるオルランド』の世界である。ただ、『狂えるオルランド』と聞いてピンとくる人がどれぐらいいるかは、ちょっと疑問だ（マイナーですよ、実際）。まあ、それはそれとして、物語は快調に進行する。前回登場のシェイの奥さんベルフィービーが、アリオストの物語の世界で、記憶を失い行方不明となる。そのうえ、鋼鉄城カレーナにやってきたシェイたちは、城の勇士ロジャー（サラセン人だが、キリスト教の女戦士に惚れこむ）をつれもどすことまで、引き受けさせられる。『狂えるオルランド』は『妖精の女王』に影響を与えた作品。そのために、舞台として選ばれたのだろう。しかし、このコンビの作品は、シェイクスピア『真夏の夜の夢』を題材にした、『妖精の王国』ですら、文化的背景（素養？）がなくて溶けこむのに苦労した。本書も、ストーリーに乗るまでに結構時間がかかった。出来の方は、まずまずといえるのではないか。

（俊）